

出来事ファイル (No.23-9)

(健康づくり教室)

みなと元町フレンド 開催のご案内

以前こうべまちづくり会館で行われていました「体操教室すずらん」が終了し、「楽しみにしていたすずらんがなくなって寂しい。」「何か体を動かせる場所を作りたい。」など、参加者の皆様の声から生まれた新たなつどいの場「みなと元町フレンド」。体を動かす体操に加え、看護師や栄養士などの専門職からの健康アドバイスも行う新たなつどいの場が神戸元町商店街連合会の主催のもと、一般財団法人サニーピアから講師をお招きし、こうべまちづくり会館にて、令和5年9月の第1木曜日14時から約1時間、毎月開催いたします。参加費は無料。動きやすい服装と水分をご持参ください。皆様のお越しを主催者一同心よりお待ちしております。



共催 一般財団法人サニーピア
担当 潮崎(しおぎき) 電話078-331-8624

■もとまちハーバークリーン作戦

8月2日(水)正午12時からの、神戸駅東地域一帯のクリーン作戦は、熱中症警戒アラートが発令されていたため中止といたしました。
毎月、第1水曜日12時より、地域の企業様有志で実施しております。多くの方々のご参加をお待ちしております。



栄町通まちづくり委員会は、8月18日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(株)KKテクノ)松本美紀・吉田零、(神戸市都市局景観政策課)小林凜、(こうべまちづくり会館)木原正剛、(佐野運輸)入山隆憲・北島幸宏、(神明倉庫(株))藤尾憲弘・大西登紀子、(神明ホールディングス)谷富友希恵、(兵庫県信用組合)山之井純子・藤原千種、(新光明飾(株))中川俊・藤田直之・西村友博・大森貴美子、(佐田野不動産(株))佐田野宏之以上、16名のみなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。



□読者プレゼント

観覧ご希望の方は、展覧会名と住所・氏名・年齢・本紙へのひと言を添えて、本紙編集部までハガキでお申込み下さい。先着順で2名の方にペア招待券をお送りします。

◎明石藩の懐事情

貨幣や明石藩札などの資料を通して、幕府や明石藩の金融政策の歴史をたどります。

会期：2023年9月9日(土)～10月15日(日)
時間：9時30分～17時30分(入館は17時まで)
会場：明石市立文化博物館1階特別展示場 (TEL.078-918-5400)



黒田半平長棟大黒天より財宝を賜る図(当館所蔵黒田家文書)



◎超・色鉛筆アート展

思わず息をのむほどに色鮮やかな原画作品120件に加え、制作過程がわかる動画、愛用の画材なども展示します。色鉛筆アートの世界をお楽しみください。

会期：2023年9月9日(土)～11月5日(日)
時間：10時～18時(入館は17時30分まで)
会場：神戸ファッション美術館 (TEL.078-858-0050)

◎安野光雅展

絵本のデビュー作『ふしぎなえ』から、近年の大作『繪本三國志』まで、やさしく、美しく、ユーモアと不思議にあふれた安野ワールドを紹介します。



《ふしぎな さーかす》1971年 津和野町立安野光雅美術館蔵 ©空想工房
会期：2023年9月16日(土)～11月12日(日)
時間：火～金=10時～20時 月土日祝=10時～18時(入館は各日閉館30分前まで)
休館日：10月16日(月)
会場：あべのハルカス美術館(TEL.06-4399-9050)

神戸元町商店街 楽市楽座 9月

◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) TEL.361-4523

9月 7日(木)～9月12日(火)チェリーの会展
9月14日(木)～9月19日(火)第37回鈴蘭台洋画クラブ作品展
9月21日(木)～9月26日(火)第40回木製帆船模型作品展
9月28日(木)～10月3日(火)(仮称)神戸建築図鑑 原画展及び関連展示

◇元町映画館(有料) TEL.366-2636

9月 2日(土)～9月 8日(金)『カメラを持った男たち—関東大震災を撮る—』
『世界が引き裂かれる時』・『NEVER MIND DA 波さ知らズ』番外地篇
9月 2日(土)～9月15日(金)『復讐の記憶』・『ウルリケ・オットティンガー ヘルリン三部作』
9月 9日(土)～9月15日(金)『メルピンとハワード』・『アザー・ミュージック』
9月 9日(土)～9月22日(金)『福田村事件』
9月16日(土)～9月22日(金)『認知症と生きる 希望の処方箋』・『ほどけそうな、息』
『Love Will Tear Us Apart』
9月16日(土)～9月29日(金)『緑のざわめき』
9月23日(土)～9月29日(金)『この次第』・『カタオモイ/海辺の彼女』(※日替り上映)
9月23日(土)～10月6日(金)『人間を撮る』池谷薫監督特集・『国葬の日』
【予定は変更になる場合がございます。】

みなと元町 TOWN NEWS



発行：みなと元町タウン協議会 住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人：奈良山喬一 編集人：岩田照彦 電話・FAX：078-391-0831

「映画を観る」だけじゃない?街に拡げたい、「映画館」の可能性

元町映画館スタッフ 高橋 未来

映画館って何をするとところ? —映画を観るところ! そのとおり、正解。でも、それだけじゃないかもよ。



元町映画館では、『蟻の兵隊』『先祖になる』などのドキュメンタリー作品を発表してこられた映画監督の池谷薫さんと一緒に、ドキュメンタリー映画制作の裏側を解説する「池谷薫ドキュメンタリー塾」という連続講座を2017年から開催してきた。どうやって撮る対象を見つけるのか?撮る/撮られるの関係をどう構築するのか?ド

池谷薫

2021 5.13-7.08 元町映画館

オンライン開催

ドキュ
メンタ
リー塾

ドキュメンタリーは「フィクション」である
いかにして「共犯関係」を築くか

キュメンタリー作品の良し悪しはどこに現れるのか?何気なく見過ごしているシーンにちりばめられた撮影や編集、音楽の「見せる」テクニックとは?そして実際のシーンの撮影中に起きたカメラの後ろのウラ話なども交え、池谷さんが自作を題材に徹底的に解説することで、映画を観たときには気づいていなかったことを発見したり、込められた思いを知ったり、思いがけない意図を教えられたり、ドキュメンタリー映画の魅力や見方を学んでいく人気の講座だ。今回は、9月23日～10月6日に池谷薫監督特集を組み塾で取り上げる作品の上映を行い、10月6日から毎週金曜の夜に5回連続で講座を開催する。

映画上映ではないのでスクリーンのある劇場内ではなく、元町映画館の2階にある小さな多目的スペースで寺子屋的に行っていた。コロナ禍ではオンライン開催したり休止したりもしつつ、いよいよこの10月に復活するのだが、やはり以前のように小さな部屋にぎっしりと人が集まって池谷さんのアツい解説を聞くという形式は考えにくくなってしまった。それは本当に濃密な熱気を浴びるようなライブ的空間と時間で、池谷さんと参加者の一体感が何より魅力だったのだが、今同じ形でやろうと思うことはできなくなった。コロナが変えたものはあちこちにあるなあと感じる。

そこで、今回からは劇場の中で開催することにした。「映画上映ではないから」という主な理由で別室で開催していたが、よく考えてみればスクリーンと

ステージがあり、客席がそちらを向いているという劇場内の配置は講座にもぴったりなのだった。劇場内でやろうと動き始めたことで、映画を鑑賞するためだけに使われていた空間が拡張されていく希望のようなものを感じた。オンラインでも受講できるようにと、できる範囲で機材をそろえ、慣れない配信のテストを今スタッフと頑張っているが、これがうまくいけば、他にもいろんなテーマの講座を企画したい。映画館って、もっと活用できるのでは?もっといろんな人に使ってもらえる場所になり得るのでは?

コロナ禍を経て(まだ終わっていないと思っているが)、客足は戻り切らずに伸び悩んでいる。コロナのピークを死力を尽くして乗り越えながら、ここに来て閉館が決まった映画館のニュースも連続している。「映画を上映する場所」を守るために、「映画を上映すること」に縛り付けられることなく、役割を拡張していくことが存続の一助とならないだろうか。映画を中心に据えながらも、さまざまな文化を発信していくことで、その街における存在意義も強化できないだろうか。池谷薫ドキュメンタリー塾を契機として、「映画を観る人」だけでなく、「映画は観ない人」にとっても意味のある場所を目指し、コロナ後の映画館のあり方を探っていきたい。



海という名の本屋が消えた (118)

平野義昌

西村旅館(10)

1954(昭和29)年4月14日、西村貫一・マサ夫妻は25年ぶりに東京を訪問する。友人100名が集まり、すき焼きの会を催した。町田梓楼は発起人・参会者の顔ぶれに驚く。政財界人・文化人ら名士がズラリと並んだ。

〈殊に老来学界の集まりにさえ滅多に出ないという牧野富太郎博士が都心を遠く離れた閑居から、車にゆられながら愛嬢に付添われて来会されたには感激した。／如是閑の語るところによれば、学問上のことなれば、老博士の頭脳はもとより気力も少しも衰えを見せないそうだ。白髪鶴の如しと形容したいが神々しい博士の姿は山の仙人を思わせる。満座の参会者が一せいに起立、拍手をもって迎えるや老博士の目はうるおった。(後略)〉註1

俗世間の会に牧野を招くことは不謹慎との声もあったが、牧野自身が「どんな無理をおしても」と強い決意。町田は牧野と貫一の30年に及ぶ関係に思いをめぐらす。〈……当時の博士は元氣壯者をしのぎ、その奇抜な行動には西村君夫妻も、ほとほとてこずらされたそうである。てこずらせられながらも、学問に一生を打込む博士の強烈な意力、真剣な態度は、西村君の心を動かさずにはおかなかった。学問の世界とはおよそ縁遠い西村君ではあるが、人間牧野博士において偉大なる存在を発見したのである。さるにても祖先の遺業たる旅館の運営に精進しつつも、世に恵まれない博士の事業に、私心をすてて永きにわたって支援を與えた西村貫一その人も、また世にまれな存在である。〉註1

世話人・宮川三郎は、出席者50人くらいと予想していたところ100人になり、急遽七輪や鍋を買い足した。牧野出席に言及。

〈……発起人の一人は植物学の世界の至宝である牧野富太郎博士で、当年九十四歳というにふさわしく、それこそ一握りの蝦みたいに収縮した老体を、娘さんに抱きかかえられるようにして出席され、満場期せずして感激の拍手を借りて迎えられたものである。発起人の名前を借りただけで結構で、決して出席して下さるなど引留めて置いたらしいのだが、いっかな聞かないと言うのである。自動車から降りてもすぐには歩けず、東洋経済の玄関の長椅子に、毛布にくるまって暫時横臥して、車の酔をさまさせばならぬほどの老齢なのに、食堂に入って暫くすると祝辞を述べたいと言って立ち上り、そんな事をされては命にかかわるからと、長谷川如是閑氏まで練り出して留めるのだが、立ったまま已に始めて仕舞っているのである。〉註1

牧野は「嬉しくてたまらぬと言う表情」ながら、広い会場に声が通らない。貫一が通訳し、さらに町田が大声で再生する。牧野は明治14年の西村旅館初逗留から始める。80分の話となれば途中で「老博士天国行きになっては大変」と、高齢組が止めにいった。まさに「生命がけの祝辞」だった。註1

参会者からこの会の冊子作成と配布を求める声があった。中外印刷・高尾清も「『世にも稀なる』美わしき集い」と感激し、当日の挨拶文言、会場内写真、出席・欠席者の返信、礼状をまとめて『無沙汰の果報』を作成し、配布した。要望が多かったのだろう。すぐに再版している。

貫一の長女春子はこの会に同行しなかったが、『無沙汰の果報』に「御禮に代へて」を寄稿。会の翌日貫一は血圧上昇したが、主な参会者宅に

お礼回りをした。木村毅宅で倒れかけ、その状態で牧野宅にも向かった。春子は貫一の短所・性格を的確に伝える。「ヤンチャン坊主」「云い出したらそちらへ曲がるばかり」「こわい者知らず」「ヅケヅケ云いすぎて雷おやち」「生来の潔癖と正義感とかんしゃく……の親分」「淋しがりやで気が小さくて純情」……。自分は40年近くそばにいても父親のことを半分もわかっていない。

〈……やはり皆さまが父より数等上で、目をむいてヅケヅケ云う父の善意と真実を汲みとっていたらぬ所は多めに見て下さる雅量の御方ばかりでこそ。〉註1

1955(昭和30)年8月25日、胃病で入院中だった池長孟が死去。遺族は密葬のつもりだったが、新聞が大きく報道したため翌日の葬儀には多くの人が参列。貫一が世話人となり、改めて9月5日に神戸市立美術館で「池長孟君を偲ぶ会」を開く。また『池長孟追悼志』を作成、多くの人々が追悼文を寄せた。

56(昭和31)年、へちまクラブは創立10周年を迎える。記念誌『へちまと十年』を出版。発起人は西尾守一(貫一ゴルフ熱中時代からのプレイ仲間)と岸本一郎(戦時中に転居してきた町内会仲間)。会員に投稿と出版費用分担を願うと、71名が寄稿、140名が費用を寄付した。物故会員33名の名をあげ感謝の意を表す。編集の山本吉之助(元神戸市山地課長、森林植物園創設)が懐古。焼け跡に残った貫一の「不燃書庫」がクラブハウスになり、ここから数々の事業、団体が生まれた。食糧難の中、篤志家の世話で芋掘りに出かけたこともある。警察の了解を取り、トラックを手配し、ガソリンも工面など、西村一家大活躍だが、貫一は「もっぱら口と筆だけ」。

〈思えば、あの頃のおっさんは若かった。終戦直後「文化人は今、金と食に困っている。これを少しでも助けよう」との大悲願を起こして、へちまクラブを創り、学者、文人に講演させて、あの頃、ピフテキと銀飯を食わせたのだから、其の鼻息の荒さに驚かされたものだ。(後略)〉註2

クラブ庭はますます緑濃く、春はメタセコイヤが芽ばえ、夏はイチヂクが棚を覆う。〈クラブ創立以来の十年間に、最初に一番幅をきかせた、へちまが姿を消してしまった。その為に、へちまクラブの名は「西村のおっさんが、へちまみたいだからかな」と感違いつている人が大分あるようだ。〉註2

松浦一(北海道大学理学部長)は前に軍人値引き要求話を披露したが、また別の話を提供する。昭和7〜8年頃、先輩学者の紹介で「西村」初宿泊。貫一が部屋に来て宿の悪いところを言え、と要求。枕について述べた。

〈枕は安眠に関係する、ところがその人の習慣で柔らかい枕を好む人と堅いのを好む人とがある、どの旅館でも寝具はよく気をつけているが、枕の好みには気付いておらない、少なくとも柔いのと堅いのと二種類位備えて、客の好みに応じてはどうか。〉註3

貫一はすぐに夫人と相談、枕用意にかかる金額を計算させた。松浦は貫一が初対面の客の声を聴き、即実行することに驚く。二人のやり取りは続いて、貫一が客を一目見れば懐具合がわかる、と言うと、松浦はトイレのスリッパの脱ぎ方で人柄がわかる、と応答。さらに松浦は当時の料理人・お直さんのことも思い出す。名人と評判なのに、偉い人が来ると知らされると緊張して必ず失敗する。

しばらくクラブから離れていた増田五良が初期の集いを憶う。

〈……仕事の上でも私生活の上でも様々な不安を伴った頃であっただけに、会へ集う者にとって、あの団居(まどい)は譬えば沙漠の中でオアシスにめぐり合った如き喜びがあった。〉註4

同じく川崎芳熊も雑誌継続に情熱を注いできた。二人は表紙も描いてきた。〈終戦後追放の身となり無聊に苦しんで居る時、毎日の様にへちま倶楽部を訪ねて、夏はへちま棚の下で涼しい風に吹かれながら、冬は大きな火鉢を囲んで渋茶を啜りながら、様々な人から話を聴き、又雑誌「金曜」を発行して熱を上げ、数年間、楽しい日を送ったことは、誠に大きな喜びでした。(中略)金曜の表紙は最初私が小磯画伯に御願ひして描いて頂きましたが、次いで、日本画の町田曲江、洋画家の田村孝之介氏、を煩わしました。しかし、後には竹中郁さんや増田五良さんそれに私自らも、心臓強く乗り出して描いたものでした。〉註5

川崎は著名人にも原稿料なしだったことを「利害を超えての友情の賜物」と感謝する。

桐山宗吉(兵庫県観光連盟専務理事)も長く交際。1923〜24(大正12〜13)年頃、貫一は社交ダンスでもリーダーだった。諏訪山の武徳殿(大日本武徳会道場、現在は公園)付属の洋館でモダンボーイたち(お金持ちのボンボン)が集まり、亡命ロシア人ダンサーの指導を受けた。クリスマスには仮装舞踏会、オリエンタルホテルで定期的にダンス会を開催した。25(大正14)年には月1回学者・芸術家の講演「シンポジウム」を始めた。才能ある若い芸術家を援助し、外国の革命家を保護した。「道楽」と反感を持つ人もいるが、もとより貫一はそういう人を相手にしない。

戦争、旅館廃業を経験し、歳もとり柔らかくなったが、「文化貢献の意志」を貫いている。〈「商売は一切嫁ハンの受持ちや、ワイは居候みたいなもんや」といい年ら、何かしら世話をし、神戸の名物、神戸の良い存在になっている、面白い人だ。〉註6

寄稿者たちはほめ殺しのように貫一を礼賛する。実は遠慮なく頑固一徹の性格と行動を冷やかす。そうしておいてマサ夫人の内助の功を讃える。そうなのだ、戦後貫一夫妻はどうやって生活していたのだろう。多少財産はあっただろうが、経済生活は謎である。

註1 高尾清編 『無沙汰の果報』へちま倶楽部 1954年
 註2 山本吉之助「へちまと十年」、『へちまと十年』へちまクラブ編・発行 1956年)
 註3 松浦一「西村君と対決する」(同上)
 註4 増田五良「ひとむかし」(同上)
 註5 川崎芳熊「へちま倶楽部の思い出」(同上)
 註6 桐山宗吉「西村貫一ロソ」(同上)
 写真 『無沙汰の果報』より。左から牧野富太郎、貫一、長谷川如是閑が談話。
 引用文は適宜新字新かなに直した。



みなとMOIOMACHケンチクさんぽ vol.26 兵庫地域会 地域まちづくり委員会

商店街育ちの元町商店街さんぽ

「今も、お店の上に住んでいますよ。」商店街育ちの私にとって、なんだかほっこりした気持ちになる言葉でした。

奈良県南部の商店街で生まれ、小さいころから日が暮れても明るいアーケードを庭のように近所の友達たちと駆け回っていた私は、商店街中が友達や知り合いで、どのお店を見ても、その家族や奥での暮らしが思い浮かぶような環境で育ちました。だからなのか、商店街を訪れると、この商店街ではどんな暮らしが広がっているのかなと考えたりしてしまいます。そんな田舎の商店街で育った私が、大学で神戸に出てきて、初めて元町商店街を訪れた時、大きく長いアーケードに、とてもワクワクして歩いた事を思い出します。

晴れの日差しが眩しいある日、久しぶりに元町商店街をさんぽしようと、大丸の方から歩き始めました。ファミリアがなくなって寂しいな、新しい店も増えているな、マルシェ的な野菜販売が多いな、マンションが建っ



カステラの香り漂う長崎屋本店



ゆるやかな時間の流れる元町滝公園

声をかけると、そこから楽しい時間がはじまりました。神戸家具の説明や、田村家具の歴史など、昔の図面や写真などを出してきてくれて、たくさんのお話をしてくれました。とても優しい表情で。見せて頂いた図面は、私が普段CADで描いている図面とは大違いで、美しいデッサンのようでした。「この前、ふらっと立ち寄ったオランダ人のアーティストさんが、シャッターにアートを描いてくれたの!!」と言って、営業中にも関わらず、シャッターを下ろして、シャッターアート“MOVE LOVE”も見せてくれました。その後も、「奥も見て下さい。」と、今では、趣味のスペースになっていますが、昔は工房だったようです。その頃に使われていた年季の入ったカンナなどもお店に飾られていました。「今はこちらで住んでいませんよね?」と尋ねると、「今も、お店の上に住んでいます

ているななど、いろんな思いが巡りました。3丁目あたりで、喉が乾いたので珈琲をテイクアウトしようと立ち寄ったお店に“日本最古の珈琲店”の文字が。隣のお茶屋さんの方に尋ねると、「船でお茶を輸出していた、船を空にして帰ってくるのがもったいないから、珈琲を輸入するようになったんです。」と。150年以上続いていて、6年前から珈琲のお店を再開されたとのこと。ふらっと立ち寄った珈琲店が日本最古とは、改めて元町商店街の歴史を思い知らされました。

香り高い珈琲を片手に歩いてると、可愛いファサードの“マルカ田村家具店”が入ろうかと考えましたが、珈琲もあるので後にしようとして、5丁目まで歩くと“長崎屋本店”の看板が見えてきました。珈琲にはカステラでしょ!!と、小分けで販売されていたカステラを1つ購入。すると、「今日、焼きたてやから、1日おいて食べた方が美味しくなるよ。」とお店の方が。思わずもう1つ購入。お店はいつからかと尋ねると「私が4代目で121年。私で終わりなんです。」と。忙しそうだったので、これ以上、話を聞くのは止めました



家具のようなファサードとアート[マルカ田村家具店]

よ。」と返って来て、商店街育ちとしては嬉しく、ほっこりした気持ちになる言葉でした。あまり邪魔してはいけないなと、そろそろ出ようとする、「もう一つ“MOVE LOVE”が近くにあって。」と、お店をほったらかして、そのまま連れて行ってくれました。すると残念そうな顔で、「この人なら、もっと元町商店街のこと教えてくれるのに、いま休憩中やね。」と。「また来ますね!!」とキョーコさんに笑顔で伝え、この日は元町商店街を離れました。

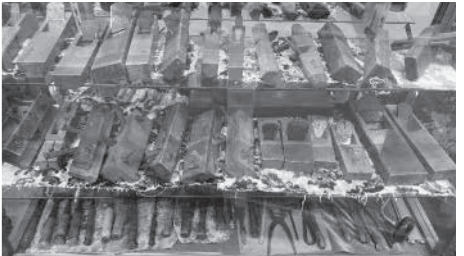
このさんぽを通して、元町商店街の方々の暮らしを垣間見たような気がして、懐かしくあたかな気持ちになりました。商店街の良さってこういうところだったと思い返し、また商店街で暮らししてみたくもなりました。

今回、感じる事ができたいい意味での“古さ”が、元町商店街の魅力の一つだと思

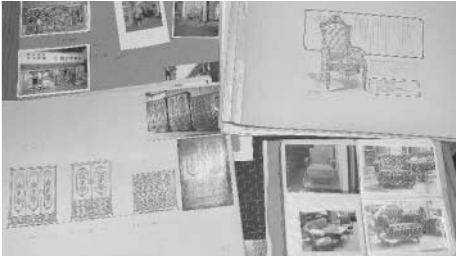
が、「私で終わりです。」の言葉はとても寂しそうにも聞こえました。こんな長きにわたって愛されているお店が終わっていくと思うと、悲しく悔しい気持ちになりました。

少しセンチメンタルな気持ちになりながら、もう少しで滝が流れる公園があったはずと、カステラと珈琲を持って足を進めました。元町商店街に憩いを与えるポケットパークは、木漏れ日が落ち、水の流れも心地よく、当日の香ばしいカステラを美味しく頂きました。公園を出ようとした時、“元町慕情の碑”を発見。そこには、“ここに在りて元町通のあすの発展を夢見よう”とあり、“三星堂”がこの地を去ってもなお元町商店街を想い、土地を寄贈した事が記されていました。ここからも、元町商店街に脈々と受け継がれている強い思いを感じることができました。

おやつタイムも終え、3丁目まで戻り、気になっていた“マルカ田村家具店”へ。ヨーロッパ風の家具等が並ぶお店の奥に、白髪でキュートな女性が座っていました。その女性は、3代目の田村嘉久さんのパートナーで模様替え愛好家としても活動されているキョーコさん。「かわいいお店ですね。」と



職人さんが使ってた道具[マルカ田村家具店]



昔の図面や写真[マルカ田村家具店]

います。こだわりや信念を守り続けているお店が並ぶから、多くの人々が足を運んでいるんだと。来年迎える150周年を通過点に“古さ”と“新しさ”が織り成す他にない商店街の魅力を積み重ねてほしいと思います。

お忙しい中、お付き合い頂きました元町商店街のみなさま、ありがとうございました。次は、いつ元町商店街をさんぽしようかな。最後に、翌日、もう1つのカステラを口にすると、しっとりしていて、当日と違った味わいでとても美味しかったです。



駒井 陽次 (こまいようじ)
 株式会社Style-A 代表取締役
 有限責任事業組合PARK Lab. 代表
 一級建築士/摂南大学非常勤講師
 (公社)日本建築家協会
 前兵庫地域会長